

## 外部評価委員からの報告書

外部評価委員 吉田 文 氏

全学共通カリキュラムのヒアリングの結果から、1. 運営組織、2. 担当教員、3. カリキュラム編成、4. 履修学生、5. 教養教育理念、6. 教養教育カリキュラムの評価の6点に関して、外部評価として報告する。

### 1. 運営組織

一般教育部の経験と反省をもとに全学共通カリキュラム運営センターを構築したこと、それを全学的に支え無責任体制とならないような運営方法をとったこと、とはいえ、センターの恒常的な専任教員がいない中で業務を円滑に遂行するために専任職員をおいたこと、などに全カリセンターの特徴がある。

専門学部制をとる日本の大学においては、こうした組織があってはじめて、教養教育カリキュラムが機能する素地ができるといえよう。専門学部教育と教養教育との有機的連繋を実現するためには、カリキュラム編成だけでなく、運営組織の権限や構成員の役割などが明確になっていることが重要だということを教えてくれるものである。

### 2. 担当教員

全学出動体制のもとに全学部の教員が、ローテーションで全カリを担当するという仕組みは理想的である。すべての教員が、教養教育と専門教育とを担当することは、役割の二重性を課すものではあるが、考え方によっては、自身の内部において教養と専門との有機的統合が可能になる仕組みである。これこそがFDの1つであると捉えることもできよう。しかし、全カリ運営センターの運営委員を担当すること、全カリの総合教育科目をテーマ別の内容で構成することなどが、どの程度の負担になっているのだろうか。もし、これらが一部の熱心な教員の個人的努力にのみ依存するものだとしたら、この全カリのシステム全体が破綻をきたしかねない。一方でFDが必要なことはいうまでもないが、他方で教員の過度の負担にならないような配慮も必要だろう。

### 3. カリキュラム編成

全カリのカリキュラムの特色の1つ

が、総合教育科目 A 群、B 群からなるテーマ別科目にある。それぞれ興味深く、工夫が凝らされている。一定のカテゴリーという枠を決め、それにもとづく履修をさせることで、教養教育の断片的な学習を防止する仕組みとしていることも評価できる。しかし、教養教育に1つの理念を与えようとするならば、また、教養教育にすべての学生が必修するコアの役割をもたせようとするならば、カテゴリー間の関連や科目間のシーケンスを考えることも必要ではないのだろうか。

ただ、テーマ別科目の場合、難易度で序列付けしてシーケンスをつけることは難しいであろう。学生の年次や専門による履修規定などを設けて、学生の学力レベルをある程度一定にした上で、科目の内容にシーケンスをつけるという工夫はできるのではないだろうか。

教養教育の総仕上げとしてのキャブストーンなどを4年次におくことも一方法かと思われる。

教養と専門の有機的統合をいうとき、教養教育の上に専門教育が乗るといふ構造を基本として考えるならば、各専門学部なり学科が全カリの総合教育科目から履修しなければならない科目を指定するというような仕組みを作ることはできないだろうか。

教員のローテーションのもとに行われている総合教育科目では、担当者が変わると内容も変わることが往々にし

て生じる。それぞれの科目で教えるべき内容に関して基本的な規定はあるが、それ以上に内容を規定して、誰が教えても一定の事項は学習するという方法をよしとするか、あるいは、基本的な合意事項のもとに個々の教員の自由裁量にまかせるべきかは、議論があってもよいのではないだろうか。

#### 4. 履修学生

専門学部で選抜されてきている学生が、早く専門に特化した内容を学習したいと思うのは当然である。そこに、この教養科目はどのようにアピールしていくかが、今後の大きな課題のように思われる。教員が凝らしている工夫は、学生に十分に伝わっているとは限らないようにみえるところがあった。

また、数百人の大教室講義のもつ問題をどう解決していくかも課題だと思われる。今後当面は、学びの基礎のような全学生必修の科目の需要はなくなる状況のなかで、教員配置や教室の手配など物理的に解決しなければならない問題は多い。

さらに、学生の履修が断片的になっていないかどうか、ある程度の一貫性ももった学習ができていのかどうかに関しても、今後分析の必要はないだろうか。

#### 5. 教養教育理念

「専門性にたつ教養人の育成」。これが全カリの理念であり、リベラル・ア

ーツ教育を掲げる立教大学全体の目標でもある。専門性の方は専門学部の専門教育に任せるとして、「教養人」とは何を知り、どのような能力をもち、何をすると考えられているのだろうか。そうした問題に関して、教員間で議論はなされているのだろうか。

これまで、日本の大学でこうした議論はあまりなされてこなかったが、何を教えるかとともに、学生にどのような付加価値をつけるかという議論も重要だと思われる。

## 6. 教養教育カリキュラムの評価

教養教育カリキュラムによる付加価値の問題を考えると、それは翻って、教養教育カリキュラムなりプログラムをどのように自己評価するかという問題になってくる。学生の授業評価、教員へのアンケート調査などはなされているが、それ以外にも付加価値をどのように測定するかという問題が残されているように思う。教養教育カリキュラムに関しては、確たる評価方法がなく、それを開発することは容易ではないが、学生に対する付加価値という視点から自己点検評価する仕組みが構築できないだろうか。

よしだ あや

(メディア教育開発センター教授)